

シンポジウム／「世間」という問いから

世間の変貌とカタリ ―戦中戦後の巫女をめぐる―

山田 巖子

はじめに

日本民俗学においては、「世間」を解明する方法として「話」を用いようという提言があった。井之口章^二は、世間話研究の意義について五点を示し、その中の三点がこの提言と関わるものである。「世間話研究の意義と課題」『西郊民俗』第二五号。

「1 集団の置かれている立場や環境を理解し、関心の所在を明らかにして世論の基盤を浮き出す」
「2 集団の性格や意志を求めめる」
「3 集団内における個人の感情の基準や常識を求めめる」。

ここでいう「集団」とは、社会学でいう準拠集団のことで、これを仮に「小さい世間」と名づけておこう。⁽¹⁾井之口はここでは、日常的にコミュニケーションのある、持続的なつきあいのある「集団」を想定しており、その価値基準を変わりにくいものとして捉えていることがわかる。

これに対して筆者は、「マス・メディアと現代伝説」(日本昔

話学会編『昔話―研究と資料―』二四号、一九九六年 三弥井書店)、「世間話」としての〈うわさ〉(宮田登編『民俗の思想』一九九八年 朝倉書店)と題する小稿の中で、「世間」を「話」によって作り出されていくものとして捉え直した。筆者は「世間話」を分析的な思考や反省を経ない「話」であると捉えてきた。これらを交わす際には、共感的な態度が要求される。世間話を交わすことで、「共同の意識」、「集団の意識」、「規範意識」が芽生えるのはこのためであると考えている。

先の論致では、誘拐事件の「話」が、事件の場に土地勘のある人々の間で囁かれ、それらが、現場を遠く離れた所にいる人々に届くまでの経緯を示した。この「話」は、当初は、より大きな「世間」(ここではマス・メディア)の示した「意味づけ」に對抗する「地元」の「解釈」として生まれた。うわさの拡大は、「現場に近い地元」という意識の拡大と結びついていた。

柳田國男は自由なもの言いであるハナシと、一定の型とリズムのあるカタリを区別したが、自由に変化してゆくハナシは「世間」の価値基準とその変化を捉える有力な道具であった。それに対して本稿では、「世間」の変貌を(口承)から捉える方法として、カタリの変化から捉える方法を示したい。型とリズムと決まり文句をもつカタリは、ある程度の恒常性を保つものである。ハナシに比べて、「変わりにくい」ものが、「世間」の変貌をどのように映し出すのかを考察したい。また、ここでは、小さな「世間」ともいえるローカルな文化の中で持続してきたカタリが、大きな

「世間」ともいえる国家的な価値基準との関係で、その持つ意味をどのように変えていったのかも明らかにしたい。

1 青森県における「口寄せ巫女への「まなざし」

青森県では、現在もイタコと呼ばれる盲目の口寄せ巫女が存在する。このイタコへの「まなざし」を考えるとときに、地方紙の分析は一定の有効性を持つ。地方紙の記事は、大きい「世間」の価値基準を内面化した記者からローカルなものが、どのようにまなざされるかを読みとる材料になり得る。

池上良正は、明治三〇年から昭和二〇年に至る青森県の地方紙『東奥日報』の巫者（池上の用語では民間巫者。盲目の女性であるイタコと晴眼のカミサマと呼ばれる男女の民間宗教者を含む）関連記事を調査・分析し、昭和一〇年代以降、青森県では、巫者たちへの弾圧はゆるやかであり、警察は、巫者たちを国家公認の神々の体系に組み込むことに変化した、と述べている（『民間巫者信仰の研究』未来社 一九九九年）。

池上の示す資料からは、警察は、小さい「世間」の規範を大きい「世間」の規範にあわせてように見せかけている、とも読める。ローカルなものの内実よりも、国家的な規範から見た時の位置づけに腐心しているように読める。

『東奥日報』の記事を詳細に読むと、イタコにはカミサマとは違う種類のまなざしが注がれていることが読みとれる。

昭和三年二月十四日の『東奥日報』には「學者連を驚かした

『おしらさま』という見出しで、柳田國男邸で披露された、青森県八戸のイタコによるオシラアソバセの記事が掲載されている。ここでは、「イタコの口伝の数々は恐らくこの巫女の死と共に滅んでしまうことδεせう」と書かれている。郷土史家の中道等の研究を伝える同年五月二二日の記事では、オシラ祭文を「関東関西地方などが衰微し東北地方にだけ未だ完全に残つてゐるもの」として、「滅びゆく前代の信仰」という位置づけをしている。昭和一九年八月一五日の、折口信夫が金木町（現五所川原市）の川倉養の河原地蔵尊の祭礼を訪れた際の記事は、イタコを和歌山から東北地方に流れて来た巫女の末裔とする折口の説が紹介されている。先の記事と同様、イタコの習俗を「古いヤマトの信仰」に位置づけようとする意図が読みとれる。

これらの記事では、自分たちの「世間」の外の研究者と接触することで、小さい「世間」の認識から距離を置く記者の態度がみてとれよう。新聞のこのような態度は、これらの信仰を「迷信」と捉えがちな地域の知識人層に一定の理解を促したものと考えられる。

2 戦時下の戦死者の「口寄せ」

戦時下では、イタコはまた、国家のために死んだ戦死者の供養によって、大きな「世間」とつながっていた。

戦時下に戦死者の口寄せに立ち会ったことのある人の証言をみていきたい。⁽²⁾大正一五年生まれの青森市西田沢の女性Aさん

は、隣家にイタコが住んでおり、「イタコの宿」として自宅を提供したこともある。昭和六年に青森市奥内に生まれたBさんは、ビルマで死んだ兄を奥内でおろしてもらったという。二人によれば、イタコの口寄せはまず、神をおろし、次に戦死者をおろしたという。Bさんは「兵隊は位がいいもんで」と言い、戦死者は他の死者とは別の扱いであったことが分かる。

ここで留意すべきことは、津軽地方の巫俗には、若年者や幼少の者を特別鄭重におろす、ハナオロシ、ハナヨセという口寄せがあることであろう³⁾。AさんとBさんは、「兵隊をおろす」時に祭壇を紅白の布で飾ったことを覚えており、ハナオロシとの類似性がある。 「兵隊」を最初におろす、というのが、もともとあったハナオロシの習俗の発展形か、あるいはそのように解釈され直したという可能性がある。このように見ると、戦時下には従来あったものが、大きい「世間」の動きにあわせて、流用され、再解釈された可能性を否定できない。

3 戦後の戦死者の「口寄せ」

「英霊」の口寄せとして、NHK弘前支局が昭和二八年旧暦六月二三日、二四日（新暦では八月）に川倉賽の河原地蔵尊（現五所川原市金木町）で取材した録音が音声記録として残っている（本田安次監修・解説『復刻 日本の民俗音楽』ビクター伝統文化振興財団 一九九八年）。

ここには三人の「イタコ」の「仏下ろし」が記録されている

が、その中の「太鼓を使う巫女」として録音されているものが、「英霊」の口寄せである。この時の「のべ六〇人」といわれる巫女のうち、数珠を使う者が大部分で、弓を使う者が二人、ただ一人の太鼓を使う者がこの巫女であった。この巫女は、北津軽郡長橋村に住んでおり、依頼者の享年二四歳の長男の口寄せを頼まれている。しかし、前年に調査した石津照爾によれば、この巫女は晴眼で、「行者」に分類すべき者という（『東北の巫俗探訪覚え書（2）——津軽地方のこと——』慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 第一〇号 慶應義塾大学大学院社会学研究科 一九七〇年）。この女性は、昭和二七年調査当時四四歳で、六歳の時に父が狂乱し、九歳から奉公に出た。東京の紡績工場で働いたこともある。一九歳で肋膜炎になり、それがきっかけで願掛けをするようになり、二五歳の時に神がのりうつった。

ここでは、「英霊」の口寄せは、イタコだけではなく、カミサマもおこなっていたことを確認しておきたい。晴眼のカミサマはイタコよりも活動範囲が広く、情報収集にも長けていると考えられる。今後は、イタコとカミサマの情報のやりとりについて考慮していかねばならない。

このホトケオロシが記録に残った背景として考えなければならぬのは、昭和二八年八月という口寄せの時期の問題である。昭和二一年二月GHQの方針に基づいた勅令が公布され、戦前から続いた軍人恩給、遺族に対する扶助料がともに停止された。昭和二八年八月は恩給法が一部改正され、七年間停止されていた

た戦没者遺族への公的扶助料が復活したのである。NHK弘前支局が記録した映像であることを考える時、口寄せが時代と関わるものであることが理解されるであろう。小さな「世間」の営みが「大きな世間」の動きとの関連で可視化される例であるといえる。

4 一九六〇年代の変化

一地方の習俗として、戦中戦後も命脈を保ってきた青森県のイタコたちの口寄せが、全国的に知られるようになるのは、昭和四〇年代、一九六五―一九七四年である。この変化は、高度経済成長を終えた後の日本回帰ブームと連動してゆくと考えられてきた。

読売新聞の全国版を見てみると、第二次世界大戦前、大戦中の記事には「イタコ」ということばはない。恐山が記事に載り始めるのは、昭和三十三年（一九五八）八月三日の朝刊からで「わたくしたちの伝説」という連載の第二六回が「青森県 北北の恐山」である。その後、一九六〇年から七〇年にかけて、イタコは計一二回登場し、全国区でその存在が知られるようになっていくことが読み取れる（青森県以外のイタコの記事を含む）。今、試みに見出しのみ列挙してみると、以下のようになる。

- ①一九六三年七月二八日「この世とあの世」②一九六五年七月二五日「歴史とともに（連載）II 下北半島の霊場」③一九六五年八月二五日「茶の間席 不思議なイタコ」④

一九六五年九月一七日「五所監督、2年ぶり『恐山の女』」⑤
一九六五年一〇月二九日「スクリーン特集 恐山の女」⑥
一九六六年七月二一日夕刊「いずみ」（恐山大祭）⑦一九六七年一月一五日「今週の祭り」⑧一九六八年一月二二日「珍しい日本の民俗芸能」⑨一九六九年二月九日「近代化と山村の宗教」⑩一九七〇年一月二五日「寒修行に学ぶ」⑪一九七〇年七月一九日「質問箱『イタコ』と『ユタ』の違い」⑫一九七〇年二月九日朝刊「祈とう師のお告げ 母親がむすこ殺す」。

これらの記事から、巫女に対する意味づけはおよそ四種類に
なることが読みとれる。
記事①は宗教学者の堀一郎、記事⑨は宗教学者の高瀬武三、⑩は宗教学者の宮家準、⑪は民俗学者の桜井徳太郎がそれぞれ執筆しており、巫女は学問の対象であることが読みとれる。記事⑧は、国立劇場で開かれる民俗芸能公演の案内で、青森県むつ市のイタコが「おしら祭文」を唱えることが紹介されている。ここでは巫女は文化財として扱われている。記事③は「未知への挑戦 死者との対話」という番組の案内で、イタコがもてはやされた背景に、オカルト・ブームがあったことを知らせている。記事⑫は、殺人事件の記事で、事件と直接関係のないイタコが「迷信」や「後進性」を示唆するものとして引き合いに出されている。

このような形で「ローカルなもの」が新たな意味づけをなされ、それが地元に戻っていく、という現象が起こってくる。大

きな「世間」における価値の変動によって、口寄せ巫女は、新たな価値をまとったといえる。

5 一九七〇年代のイタコの口寄せ

一九七〇年代は、イタコへの認識に変化が起こっただけでなく、イタコのカタリを捉える方法にも大きな変化が起こっている。

イタコの語りについては、戦前から関心が寄せられ、八戸郷土研究会の小井川潤次郎は、地元のイタコから詞章を聞き取り文字に起こしている。しかし、客の依頼によって行われる、即興性の高い死者の口寄せは、記録や研究の途がなかつたといえる。しかし、一九七〇年頃からカセットテープレコーダーが普及しはじめ、調査と記録の方法にも大きな変化が訪れる。

そのことが了解されるのが、昭和四十六年、四十七年（一九七一年、七二年）東北学院大学の民俗学研究会が行った恐山のイタコの口寄せ調査である〔岩崎敏夫編『東北民俗資料集』（二）萬葉堂書店 一九七二年〕。依頼者にあわせた口寄せの実態が公にされた意義は大きい。

この中に戦死した夫の「口寄せ」の事例がある。「呼びことば」では、「靖国神社の寺々から、おりて」とあり、イタコが死者のいるところを「靖国神社」とは認識しながらも、死者の納まっている場所を「寺」と認識していることが分かる。

「仏のことば」では「おんきょう（恩給）つくまんでに皆勤め

たいと思うて」と生前の秘めた思いが語られる。また、遺骨が帰ってこなかったことを、「なんちゃ、おら命上げたためしあるだべ」と嘆く。しかし、「お写真は靖国神社にあげられて、千人万人の見物されて、尊まいお方に尊重されて」と「英霊」のほまれを語る。また、「みな呼んでくれるときだら、…略…仏の汚れた座敷さ呼ばねで」「神の御位のごとで呼んでくれる」と、他の死者との区別を要求する。「こういう恐山、慈覚となれば、お神楽さ出であれば靖国神社と変わりない」と語り、自身が呼び出された恐山を靖国神社に次ぐ場所として位置づけている。

「みんなどうかそれみんな付金頼りに楽しんで、こりゃ亭主のみな命、金かねだと思て」と語り、恩給が、命の代償であることを遺族に思い出させる。さらには、「亭主ていしゅの付金あるまで、…略…靖国神社に度々見物に参りたり」と、恩給と靖国神社の参拝の関連を示唆するのである。

「送りことば」では、「連れもない靖国神社のお寺まで、喜び帰かえる神かみこと」と述べ、死者の霊が墓でも仏壇でもなく靖国神社にあることを述べて終わる。遺族の死者への思いを反映したカタリであることが読みとれよう。

先に紹介した、記事②の恐山大祭の紹介記事には、その中で青森県が恐山を観光コースとして売り出すために県道を拡張中であることを伝えていた。

観光客相手の口寄せについては、高松敬吉が、昭和五〇年（一九七五）にもつ市大畑のイタコが静岡県から恐山に来た依頼

者に戦死者をおろしたことを記録している。このイタコは大正一三年の生まれで、一九六〇年代後半から「商売」を始め、ホテルで観光相手の口寄せも行っていた〔高松敬吉「巫女と他界観の民俗学的研究」法政大学出版局 一九九三年〕。観光客相手の口寄せが新参のイタコの巫業であったことは注意してよろう。

新たな依頼者たちが恐山にやってくる一方で、イタコたちのもともとの「商売」先でも、世代交代によって従来の作法を知らない依頼も始まる。

高松敬吉は、昭和四六年（一九七二）に、下北郡東通村目名の女性が家で八月一五日にホトケオロシを頼んだことを記録している。その時、この女性は、父親を戦死した息子より先に降ろしてもらった。ホトケを降ろした時に、ホトケは「これから先なれば、いつでもわれを呼ぶとときに、親より先に呼んでくれる。われは、^{ホトケ}仏じゃないよ。神の身分となりおいで、親よりも一段も二段も商い所に、靖国神社に、これ祀られで」と語って口寄せの順番を戒めた〔高松 一九九三年〕。

このイタコは、明治四〇年生まれのもつ市大湊のイタコである。戦前から巫業をしていたこのイタコにとって、戦前、戦中、戦後は連続した時間の中で捉えられており、戦死者を先におろすという順番は変えてはいけないものと捉えていたと考えられる。

一九七〇年代には、「英霊」という価値は、大きい「世間」とっては必ずしも共有されたものではなかった。変化の遅い東

北の巫女の一部が古いことばと作法を守っていたため、忘れられようとする戦死者の「名誉」を思い起こさせる役割も果たしていた。遠方からの依頼者はこのカタリによって「戦後」の長年の胸のつかえを降ろしたといえる。

おわりに

青森県のローカルな文化に属するカタリが、大きな「世間」との関わりでどのように変貌していったのかを見てきた。イタコが「英霊」をおろすのは、戦時中であっては大きな「世間」の動きにあわせた変化であったと思われる。しかし、その内実は、従来あったものの再解釈であった可能性がある。また、大きな「世間」が忘れたことを、変化のゆるやかなカタリは保っており、一九七〇年代には、大きな「世間」の価値変動に満たされない者が、移動によって新たな聴衆としてカタリ場に登場してきた。また、小さな「世間」の中でも、大きな「世間」の変動にあわせて忘れようとしている古い価値をカタリが思い出させる役割も果たしていた。

青森県では近年、イタコの減少によって、託宣やホトケオロシの場にカミサマと呼ばれる民間宗教者がとって変わる現象が生じている。しかし、巫女が変わり、聴衆が変わっても、韻律のあるカタリが必要とされていることに変わりはない。巫女のカタリの場合とカタリそのものの変化を把握するだけでなく、それが置かれて「世間」の文脈もまた、把握しなければならぬ。そし